座談会

ROUND TABLE DISCUSSION

創刊10周年記念座談会

司会 **満屋 裕明**
Hiroaki Mitsuya
国立研究開発法人国立国際医療研究センター研究所所長・理事
熊本大学医学部附属病院総合臨床研究部特別招聘教授
米国国立衛生研究所・米国国立癌研究所・レトロウイルス感染症研究部部長

岡　慎一
Shinichi Oka
国立研究開発法人国立国際医療研究センター
エイズ治療・研究開発センター長

立川 夏夫
Natsuo Tachikawa
横浜市立市民病院感染症内科部長

松下 修三
Shuzo Matsushita
熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター
臨床レトロウイルス学分野教授

AIDS治療のこの35年を振り

第１部
HIV 治療の歴史を振り返る

はじめに

満屋　2010年の『HIV感染症とAIDSの治療』の創刊以来，10年が経過しました。当時と比べてHIV感染症治療の原則が大きく変わったわけではありませんが，抗HIV薬の開発は長足の進歩を遂げ，より副作用が少なく，耐性が発現しにくく，効果が強力で服薬回数が少ない薬剤が登場しました。今や2剤レジメンにより，「3剤以上から成る抗レトロウイルス療法（anti-retroviral therapy；ART）で開始すべきである」というかつてのHIV感染症の治療原則さえもが変更されました。本座談会では，HIV感染症とAIDSの治療において先駆的な取り組みを続けてこられた本誌編集委員の先生方にお集まりいただき，第1部ではAIDS治療のこの35年を振り返り，第2部ではこれからのHIV診療の課題と展望についてディスカッションしていきたいと思います。

治療薬開発初期の課題

満屋　はじめに，AIDS治療薬の開発に携わった経緯と当時の課題について私からお話します。1982年に留学して米国国立衛生研究所（National Institute of Health；

SAMPLE

Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.